

## あいさつ

京都大学大学院文学研究科・文学部は平成18年に創設百周年を迎えました。本研究科・学部は百年の伝統を基盤に、6つの系からなる学術の窓を広く世界に開き、先端的な人文学、社会科学の教育研究拠点のひとつとして活動してまいりました。その成果は21世紀COEやグローバルCOE、あわせて3件の採択結果にも示されているとおりです。この百年の間にはさまざまな出来事がありましたが、特筆すべきは平成16年からの京都大学の法人化であります。法人化に伴う組織制度上の変更が教育や研究に広くまた深くその影響を広げつつあります。法人化により定められた、第1期中期計画という新しい枠組みに合うように4年半にわたり、教育と研究上のさまざまな事項につき改善の努力を重ねてまいりました。この間、教育と研究をめぐって、自己点検・評価が求められる状況となり、それに基づき外部評価もおこなわれるようになってまいりました。ソクラテスは汝自身を知れという標語を人生の指針としたと伝えられていますが、自己点検・評価も外からの評価を知ると同時に自身をも知る（セルフアウェアネス）ところにその存在の意義の一端があるように思われます。このような状況のもとで、本研究科・学部の教育と研究の活動の現状とその評価について本報告書を刊行する次第であります。

京都大学大学院文学研究科・文学部における教育の現状と課題についての、自己点検・評価報告書が刊行されたのは平成15年でした。その後も数年ごとに刊行の予定でしたが、あとがきに記されているような諸般の理由から、本報告書は予定より大幅に刊行が遅延してしまいました。しかし、内容については従前の報告書と同様に教育と研究の活動の現状とその自己評価が詳細に記述されており、認証評価にも十分に対応したものとなっていると考えております。池田秀三教授を委員長とする自己点検・評価委員会の委員諸氏に厚く御礼申し上げますと同時に、刊行にいたるまでご協力いただいた関係教職員諸氏にも心から御礼申し上げます次第です。

平成20（2008）年10月

京都大学大学院文学研究科長 荻阪直行



## 目 次

はじめに

第一章 文学研究科・文学部の活動状況 . . . . . 3

第二章 文学部の教育活動の現状と自己評価 . . . . . 13

第三章 文学研究科の教育活動の現状と自己評価 . . . . . 53

第四章 教員の研究活動と自己評価 . . . . . 93

付 録 補足資料 . . . . . 199

あとがき



## はじめに

本報告書は、京都大学文学研究科・文学部としては、平成7年および平成15年に引き続いて刊行される第三次の自己点検・評価報告書である。その刊行にあたり、まず平成18年度の自己点検・評価の意義を確認しておきたい。

本報告書は基本的に二つの意義を有している。その一は、いまも述べたように、平成7年版（『京都大学文学部の現状と課題 自己点検・評価報告書』）、同15年版（京都大学文学研究科・文学部自己点検・評価報告書—教育の現状と課題—）につづく第三番目の自己点検・評価報告書であるということである。ここでは本研究科が自己点検・評価を実施してより以来の一貫性と継続性が保持されていなければならない。とくに前回の報告書との継続性が重視されなければならないであろう。

第二の意義は、法人化以後の初めての自己点検・評価報告書ということであり、したがって、上述の継続性とは逆に、法人化を踏まえた新たな視点が導入されていなければならないであろう。具体的に言えば、中期目標・中期計画に即した自己点検・評価がなされていないということである。自己点検・評価は中期計画全体をその対象とするものであるが、自己点検・評価自体ももとより中期計画中に明記されており、三年に一度自己点検・評価を行うこととなっている。すなわち本書は中期計画にもとづく自己点検・評価の報告書であり、また同時に中期計画達成の中間報告書としての意味も有している。

以上述べたごとく、本報告書はこれまでの自己点検・評価を継続しつつ、また同時に中期計画の中間報告という新たな意義を担うべく構想されたものである。前者の継続性を維持するために、本報告書ではまずはじめに第一章として「平成16～18年度の文学研究科・文学部の活動状況」と題して、前報告書以後より現在に至るまでの文学研究科・文学部の研究・教育の活動状況・経緯を概観することとした。

その概観の上に立って、本論に当たる「文学研究科・文学部の活動の現状と課題」が記述されるはずである。この本論の構成と内容をいかなるものとするかで、本報告書の性格が決まってくる。そこで文学研究科・文学部自己点検・評価委員会では、いかなる項目を立てるか、あるいはどのような方向から記述するか、といったことがらについて議論を重ねた。もちろん全体としては、上述のとおり、本論において中期計画の中間報告を行わなければならないのであるが、単なる総花式な達成度の事務的記述は望ましくなく、文学研究科・文学部として特にアピールすべき面に重点を置くべきだというのが委員全員の共通認識であった。また研究と教育のいずれに重点を置くかということも議論の対象となった。前回は卒業生等のアンケートを中心としていること、したがって「教育の現状と課題」という副題からもうかがわれるように、ほぼ教育に関する問題にのみ論点が限定されていたことからすれば、今回はむしろ研究活動状況に中心を置くのが自然と考えられていた。

ところが、そうした議論の最中に、本報告書の性格を規定する極めて重大な案件が発生した。それは、京都大学が平成19年度に大学評価・学位授与機構による「認証評価機構による点検・評価」（以下「認証評価」と略称）を受けることが確定的となり、その準備としてまず部局段階で「認証評価」の基準・観点に即した観点カードを作成することが全学の自己点検・評価委員会から求められたのである。その要請を受け、文学研究科の委員会としても観点カードの作成に取り組むこととなったのであるが、認証評価は教育面を中心と

した評価であり、その作成と並行して全面的な研究評価を実施することは物理的に困難と判断された。そこで委員会としては研究科長と相談の上、今回の評価書は認証評価に即したものとすることに決定し、連絡会議の了承を得、さらに文学研究科の最高意志決定機関たる教授会の了承を得た。

以後、10回を超える会議を開き、各観点カードに対する文学研究科の対応方針を決定した。決定後、委員全員による分担執筆により、観点カードの作成に取り掛かり、平成18年度末までにカードの作成を終了し、それをまとめて文学研究科・文学部の認証評価書として全学の自己点検・評価委員会に提出した。本書の第二章「文学部の教育活動の現状と課題」および第三章「文学研究科の教育活動の現状と課題」はその認証評価書を基本的に踏襲して掲載するものである（ただし、提出版そのままではなく、かなりの修正が加えられている。それはさらに適切な内容にすべく改善に努めたからであるが、体裁の問題も関係している。と言うのは、提出版では字数の制限もあり、全学的な書式の統一もあって記述の方式が規定されていたため、文言が必ずしも部局の自己点検・評価報告書にはそぐわない点もあるからである。また、提出版では根拠資料を必ず明示することが要請されており、多数の資料を添付・掲示したのであるが、本報告書では煩雑を避けるために、資料内容の提示は必須のもののみに関り、大方は資料の名称のみ記してある。なお、個々の基準・観点を並載すべきかどうか迷ったのであるが、本書の読者全てが基準・観点を熟知しておられるわけではないことを考慮して、敢えて並載することとした）。

また、部局の自己点検・評価報告書としては、その性格上、認証評価を基本的にそのまま転載することに問題のあることは自覚しており、全面的に書き改めることも考えたのであるが、認証評価の基準・観点に対する文学研究科・文学部の現状をありのままに示すこと、および今後7年ごとに行われる同評価の第1回を記録に留めておくことはあながち無意義ではないと判断して、このような体裁をとることとした。

ただ、前述のごとく、本報告書は中期計画の中間報告としての役割も担っており、その点も考慮しなければならないのであるが、幸い認証評価の基準・観点の大半は京都大学中期目標・中期計画の教育に関する中期計画と相渉っているので、その対応箇所を提示することで、一定程度、その役目を果たし得ると考えられる。よって、各観点の末尾に中期計画の対応箇所を表示することとした。

また、研究部分に関する自己点検・評価として、不十分ではあるが、第四章として全教員の平成16～18年度の研究業績およびそれに対する自己評価を掲げ、もってそれに当てることとした。これは文学研究科・文学部中期計画の「研究の水準・成果の検証に関する具体的方策」に「平成18年度に文学研究科の自己点検・評価を行い、その際には個々の教員に3年間における研究活動の自己点検結果の提出を求める」とあり、また「研究活動の評価及び評価結果を質の向上につなげるための具体的方策」に「個々の教員に研究活動についての総合的な自己評価を求める」とあることに対応したものである。

以上が本報告書の刊行に至る経緯の説明であるが、その体裁と内容の凡例としてお読みいただければ幸いである。